



- ・ テーブルクロス累計給食支援数：219,126 食(2019年1月末現在)
- ・ 2019年1月支援実績：8,292 食

久しぶりの学校訪問の旨を連絡すると、「給食時間の様子を見てほしいので、13時には学校に到着してくださいね。」と返信が来ていましたが、移動道の渋滞で大幅に時間がずれてしまい間に合わなくなってしまった私たち。でも子どもたちが我慢をして待っていてくれました。

「美味しい!」「食べて力が湧いてきた。」と、笑顔で嬉しそうに卵や牛乳をほおぼる子どもたち。「卵好きな人?」と聞くと全員が力いっぱい手を挙げて「ハイ!」と、返事をしてくれました。そして、食べ終わった後は、それぞれが自分の食器をもって学校の水道へ移動し、さっさと綺麗に洗います。低学年の子どもたちの分は上級生が集めて洗います。それ以外の生徒は食事場所の清掃をします。その手際は毎日繰り返している事で素晴らしい位に良く、あっという間に授業に戻っています。

この日は週に一回の卵と牛乳の日、日本の私たちにはダイエット?と思えるような内容ですが、ネパールの子どもたちにとっては御馳走なのです。卵はまだぜいたく品で、お客さんがお越しになった折に出す食べ物の一つでもあるほどです。貧しい農村にとって家で飼っているニワトリが卵を産んでも食べるよりは雛にかえしてニワトリにして売る方を選ぶために、身近にニワトリが居ても家で卵を食べる機会はとても少ないのです。

このスリーサンティ小学校で給食を始めたのは今から25年前です。その当時は子どもたちの多くが栄養不良でやせ細っているだけでなく、成長不全の子どもが多く健康状況も悪く病気になっても中々回復しない状況でした。まして学校に通う子どもたちの数は、村の就学年齢人口の5分の3ほど。学校に来るよりも食べるために働くことが優先されていました。その中で学校給食の開始は画期的な取り組み、でも子どもたちによる当番制度を導入することをこちらが条件としたことで先生たちは実施を躊躇しました。なぜならカースト制度による分業が当たり前の社会の中で、学校が生徒に自分たちの食べる準備や後片づけをさせる事は無理と決めつけていました。「平等と共に真の教育」をこの教育現場から広げる事は必ずこの村にとっての力に繋がると思う。とのこちらの想いを汲み入れ、実施が決定しました。

当時は全校生徒60名ほどの中で始まった給食ですが、まずの大きな変化は学校で卵と牛乳を食べることが出来る!と就学人数がどんどん増えてきたことです。嬉しい悲鳴と共にそれほど食べることがままならない状況であったことの表れでした。しかし、子どもたちが一人でも多く就学するようになった事は、村の大人の中の話にもなり、子どもたちの当番の指導にもかかわってくれる村民が現れ始めました。子どもたちに仕事をさせるなんてと批判的な声も多くあった中ですが、当番をすることで子どもたちの積極性が出てきていることを実感し始めた先生たちは、PTAの人たちをどんどん巻き込んでいく事を始めたのです。それが壁を一つ破る事に繋がっていきました。

「給食を如何に継続していくか。」支援するこちら側と学校側の両方にも課題が生まれ、スタートした時以上に、その後はチャレンジの連続でした。チャレンジについては次回の私たちの報告にて、続きをお話させていただきます。



6月に給食支援ツアーを開催予定です!

